

Presented by Stardust Books

創星

Vol.5

Take Free

目次

3	短歌10首 春のひかり	鳩山豆子
5	思えば、福岡	一路真実
7	妄想百景	マチコ・ネコ・マッシングラ
10	桜の季節	ババタカオ
12	イヌとペンギン	いちろまみ
17	サブカル対談	鳩山豆子×一路真実
22	クラシック音楽・教養のお時間	天沼太郎
25	僕は空気が読めない	一路真実
34	Philosophy of Stardustbooks	
35	編集後記	

*短歌10首 春のひかり 鳩山豆子

まぼろしが訪ねてきたよ傾けた水と光の隙間を越えて

ああそれは雪と光の違いでしょう押し寄せてくる連れ去っていく

銀色の光が届く 恋人が沈んだ宇宙飛行船から
海へ続く坂道のよに取り返し着かないものを愛したいだけ
雨上がり桜まみれの体ごと抱きたい春はどこにもいない
雷鳴とけものの涙 春風よ君は何にも知らなくて良い
今のうち街の灯りを全て消し逃げれば余計傷が残るよ
忘れたくないこともある花びらがひとつひとつの光を隠す
こんなにもまあい夜空灯台の七色の雨世界の終わり

永遠が終わってそっと本当の永遠になるさよならことり

思ひは、福岡

一路 真実

東京から福岡へと戻って来た。いや、戻って来たという言い方はあまり適切ではない。生まれ故郷は北九州市で、東京を離れた私の次の家は、住んだことのない福岡市だったからだ。まず、言葉が違う。私は博多弁を話せない。天神にあるデパートの地下食品売り場の洋菓子を眺めていたら、後ろにいたおばちゃんが、

「シャレとんしゃあねえ」

「そうったい。シャレとんしゃあやろ」

博多弁はしゃあしゃあうるさいなあ、と思った。しかし、私の方も負けじと、

「博多弁っち、しゃあしゃあっち、言いようっちゃ」

北九州弁が母語なわけ。北九州市には「チャチャタウン」というショッピングモールがあるくらい、私もちゃあちゃあうるさい街の女

なのだった。(もっとも六年間も東京にいたためか、方言はあまり出なくなっているのだけれど。)

福岡に戻って来て、気付いたことがある。あまりに、空が赤いのだ。夕暮れ時に職場の窓から見る福岡の空は、たいてい赤い。夕暮れだから当たり前と思っではいけない。夕暮れの空は、黄色のときもあるし、昼間の水色を湛えたまま夜の濃紺へと変化することもあるのだ。ふと気付くと、空全体が赤。雲は紫色になっている。しかも、それがほぼ毎日続くというのは珍しい。これが、福岡の空なのと思った。

福岡で自動車の免許を取得してからというもの、志賀島へドライブに出かけることが多くなった。休暇村というホテルに車を停め、砂浜でぼんやり海と空を眺める。東京にいたときも、よく東京湾周辺に行ったものだが、志賀島から見る玄界灘は少し違う。周辺の島々込みの海なのだ。空のうっすらとした光で彩られる赤黄紫から、早くも夜になった群青まで、玄界島や能古島の黒い影が、色のコントラストに自然のラインを引いていく。この黒のラインがあるからこそ、

周りの色と光が際立つのである。暗闇の海から定期的に届く波が、浜辺に打ち上がって跡を残す。海や砂浜は真っ黒なのに、その波の跡だけが空に反射して赤く光る。見回すような灯台の光とぼつんと夜空に現れた星が、こちらへ輝いてメッセージを送ってくる。浜辺に人はほとんどいない。だから、見える景色すべてが、この瞬間、私だけのものになるのだ。

初めは運転の練習のため、志賀島へ向かっていた。島へと続く、「海の中道」というハキロもの一本道が車を走らせるのにちょうど良かったのだ。堪能した志賀島を背に、一本道の後に続くのは本土へ渡る海の中道大橋だ。橋からは、博多湾を超えて福岡市街の夜景が見える。都会のきれいな人工的な明かりは、自然に慣れ切った私を、少しずつ現実へ引き戻してくれる。橋は、非日常と日常を繋ぐために渡るのだとさえ思えてくる。

しかし、橋を渡り終えた後の埋立地に突如そびえ立つのは、トリブルタワーの高級マンションだ。異様に新しい住宅街は都会的で、私

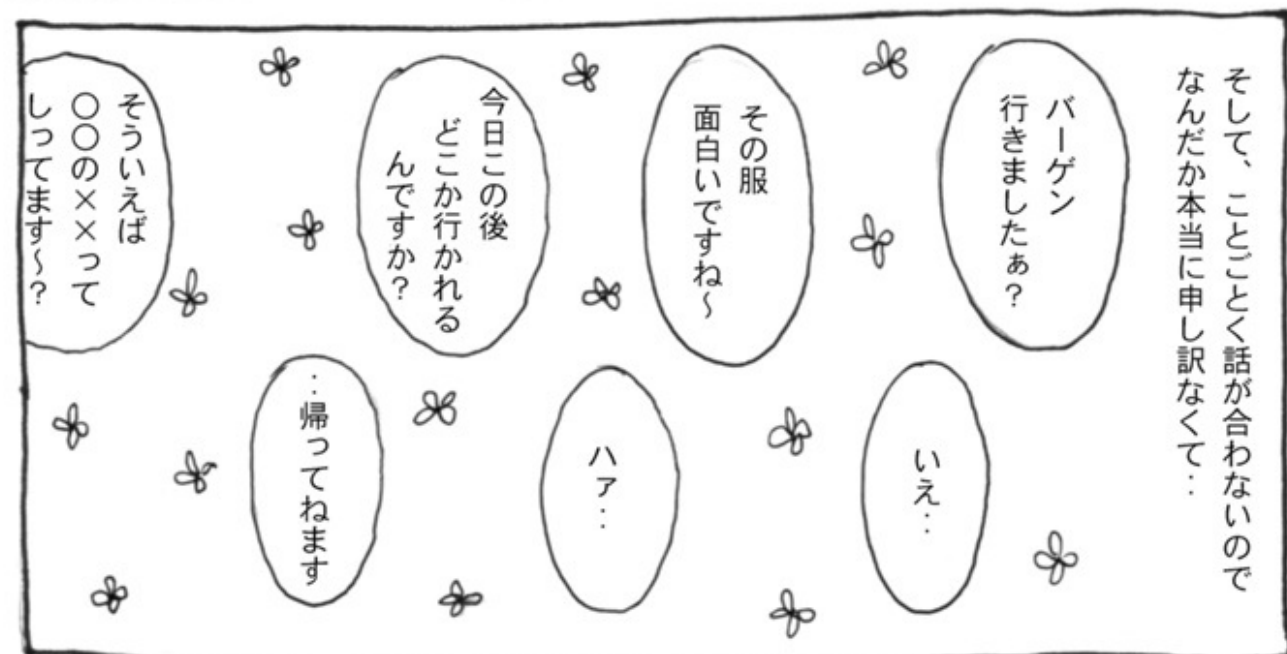
にまた非日常な世界を彷徨わせる。そして、見慣れた道に繋がり、ようやく日常が戻って来る。この非日常と日常のグラデーションが絶妙で、月に何度も足を運んでしまふのだった。

福岡に戻って来て、驚いたことがある。空を飛ぶ飛行機が、あまりにも近いのだ。ゴーンという音がするので空を見上げると、飛行機の翼に書かれている機体番号までもが、なるほど読める。福岡空港は博多駅まで五分、天神駅まで十分と、街のと真ん中にあるのだ。

飛行機を見ると、いつも思い出す。両手のパイサインを重ね合わせてできる四角形の穴の中に、飛行機を捉えようと願いが叶う。小学生のときに流行ったおまじないだ。誤ってヘリコプターを捉えてはいけない。今まで捉えた飛行機の数ゼロに戻る。条件反射は怖いもので、やはり今でも上空に飛行機があると、思わず見上げてしまう。

こんな私も、今年の春から転勤でまた東京に戻る。両手で作るパイサインの中に、機体全部が入りきれないほどの大きな飛行機を捉えながら、次なる土地への幸運を祈った。

(終)



ましてや…こんなことできないですね…



こんなかんじに
したいのですが

おまえじゃ
むりだって！
プクク！

とか
思われて
そうで…

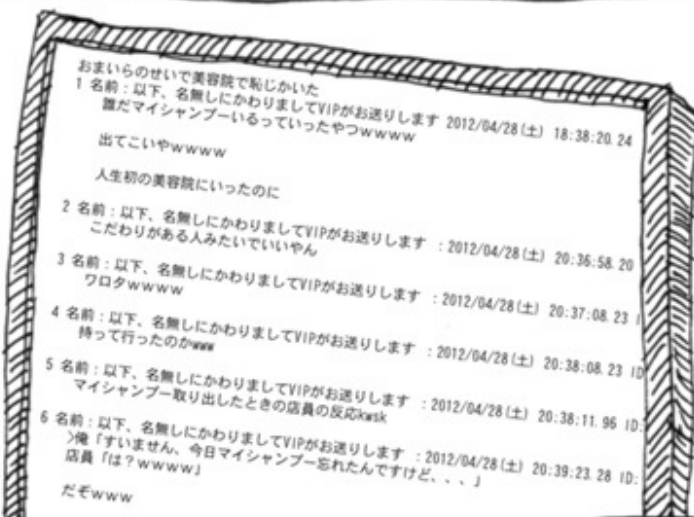
美人

なので、オーダーは一択。

みじかく
してください

これだけです…

某ちゃんねるをみていても
美容室が苦手とか、
行く勇気がないなどという話を
よく目にします



やはりオタク的な人にとっては
美容室などというおしやれな場所は
鬼門なのでありますよ…
でもね…髪は伸びるんだよ…

そこで
提案します

こんな美容室は
どうだろうか

ドーン！！

美容師さんは人気キャラの
コスプレでお出迎え！



店内は
ファッショ
ン誌
ではなく
漫画がズラリ！
まるでネカフェ！

ヘアカタログには
アニメキャラの
個性的なヘアスタイルがならぶ

今日はいかが
されますか？

武闘系
エリー
ハー

サイトキ
ベナウス



じゃあ
こんな感じで

かしこまり
ました！

どうでしょう。

どなたか：

この企画買いませんか：？

こんな店作ってくれませんか？

漫画がズラリのくだりだけでも

かまわないんです：

おねがいします：

桜の季節

ババタカオ

桜が散り始めている。

涼子は、缶ビールを片手に、舞い落ちる一片の花びらを見ている。

恋人の陽介とは、年が20以上離れている。涼子からしてみれば、好きで一緒にいるのだから何を気にすることもない。

むしろ、若さからくるがつつくようなところがなく、そういう落ち着いたところに惹かれたのだ。

しかし、付き合い始めると、陽介はやけに歳の差を気にするような発言をするようになった。常に自分が若くない事を気にしている様子だった。

涼子は、そんな陽介を見かねて、同棲を始めた。気の小さな男だとは知っていた。だから、そばにいてあげたら、安心するのだらうと思ったのだ。

しばらくは、幸せな日々が続いたが、やはり陽介は年齢を理由に、自身のなさを訴えてきた。「僕は心配だ。君には、僕よりもっとふさわしい、若い男の方がいいんじゃないだろうか……」「……いい加減にして！」

そうやって、アパートを飛び出したのが、今朝であった。

「本日は、晴天なり……」

花見客の楽しそうな声に囲まれて、涼子は場違いな感覚を味わっていた。

涼子には、そういう孤独を愛する面がある。それ故、陽介のような男に安心感を憶えるのだらう。

陽介の控えめな態度は、涼子の孤独を邪魔することをしないのである。そして、それを柔らかく包む。

問題は、陽介自身がそれに気づいていないのである。

缶ビールがなくなった。

「……帰ろう」

涼子は、桜並木をアパートに向かって歩き出した。

向こうから、陽介がコンビニの袋をさげてやってきた。

「ごめん」

陽介は、開口一番謝った。

袋の中には、涼子の好きな銘柄のビールが入っていた。

それを見たたん、涼子は涙を流した。

「あなたがあたしに向いてるとか、どうでもいいの。あたしが側にいてほしいから、一緒にい

るの！ わかる？」

「……分かった。ごめん。ありがとう」

そう言って、陽介は涼子の肩を抱き、ベンチに腰かけた。

涼子は涙目で、一面がピンク色に見えた。

「きれい」

そう言って、陽介に体を預けた。

パイギンと 連載第5回

いちろ まみ

あらすじ

ペンギンのぺんちゃん、南極大学から日本のある大学に留学中。この物語は、ぺんちゃんと相棒のイヌが織りなす不思議なお話。

第8話 イヌの回想

星が空にキラキラと輝いて、時に涼しい風がびゅうっと吹き抜ける夜でした。イヌとペンギンのぺんちゃんは、クラスコンパの帰り道に過去の話をしていました。

「次はイヌが話すわふ」

そう言って、イヌは遠い目をして話し始めました。帰り道を見つめているようで、実際はどこも見つめていないような、そんな雰囲気の間でした。

それは、イヌと象のふあうふあうが上京した日のことです。二匹は沖縄から海を越えて、東京のある大学を受験しま

した。

受験会場は、いろいろな生き物でこった返しています。

人間、犬、猫、鳥、象、キリン……。いろいろな生き物が自分の受験室を探して、うごめいていました。まるで何かのお祭りが開催されているかのようです。大学内の道という道は、生き物で埋め尽くされていました。

建物を探し、イヌとふあうふあうはお互いの受験票を見合いました。

「イヌの部屋は十六号館の二階だな。オレは四階。お互い頑張るふあう」

ふあうふあうはそう言って、大きな体を揺らしながらさっそうと歩いて行っていました。

イヌはふあうふあうの後ろ姿を見送りながら、少し寂しくなりました。

「クウーン」

鳴きながら二階の部屋へ行くと、毛並みがそれぞれ異なる様々な種類の犬たちが座っていました。

イヌががらりと扉を開けると、みんなのくりくりした目が一斉にイヌを見つめました。

「鳴いたかい？」

そう言って、試験監督の犬が話しかけてきました。

「わふ……」

イヌはきよろきよると辺りを見回しながら言いました。「生き物選抜試験なのに、この部屋は犬しかないわふ」

ぺんちゃんは首をかしげて、イヌの話をさえぎりました。
「生き物選抜って何だい？」

「人間も、犬も猫も象も、みんな一緒の大学に入れるわふ。だから生き物選抜。昔は、人間しか大学に行けなかったわふ」
ぺんちゃんは南極大学からの留学生ですが、イヌは正規の学生です。日本の入試制度についてイヌは説明してあげました。

「そうぺひか。南極大学はペンギンしかいないから、分かんかったぺひ」

ぺんちゃんはひれでおでこをぺチンと叩きました。

「動物みんなが受験できるようになっても、いろいろ問題があったわふ。父さんが言ってたわふ。犬は血統書を見せて『犬特別選抜試験』を受けなきゃいけないかった。だから、雑種の犬は駄目だし、犬の枠は人間に比べて受かる数も少なかったわふ」

イヌは少し寂しそうにしっぽを丸めてしまいました。

ぺんちゃんも少し寂しくなってしまうたので、立ち止まって体をぶるぶる震わせました。

「続きを聞かせてぺひ」

全ての生き物が受験できるようになったはずなのに、そこには犬だけが故意に集められたようで、他の生き物は見当た

りませんでした。

試験監督の犬は優しく教えてくれました。

「犬の集まりがいいだけだよ。まだ集合時間まで一時間近くあるからね」

ふうんと一息ついて、イヌは自分の番号の席を探して座りました。

後ろの犬同士が話しています。

「今年の犬の受験者数は少ないらしいわん」

「ぐるぐる。でも数匹しかとらないって噂わん」

イヌはまた不安になってきました。心臓がドキドキして呼吸が速くなり、次第に口から舌が出てきました。

はっはっはっはっはっ。

どんどん受験者が集まってきました。ウサギも猫もダチョウも、様々な動物が教室に入ってくる度、みんな頭が良さそうに見えます。イヌの頭の中で動物の顔がぐるぐると回り始めました。

（心臓がドキドキするわふ！ どうすればいいわふ?!）

試験監督の犬が立ち上がり、

「では、時間なので説明を……」

と言った瞬間、扉がまたがらりと開きました。

イヌはびっくりして、思わず立ち上がりました。そしてあとと驚きました。

「亀くんわふ！」

そこにいたのは、なんと小学校以来会っていなかった亀く

んでした。

亀くんは時間ぎりぎりに入ってきたのに、のっそりと進んできます。そして硬そうな甲羅からぬつと首を伸ばすと、イヌを見つめてゆっくりと言いました。

「イヌくん、ひさしきぶりかめかめ。きくぐうにも」となりのせきかめかめ」

その亀くんのスローペースを見て、ようやくイヌは落ち着きを取り戻すことができました。

イヌはしつぽをふりふりしながら、丸い目をさらに丸くして輝かせていました。

「亀くんも受かったべき？」

ぺんちゃんも負けじと尾ひれをふりながら聞きました。

「受かったわふ。でも、授業に間に合わないことが多くて悩んでしまっ……。今は休学してるわふ」

「あらら」

ぺんちゃんはひれで頭を抱えてしまいました。

第9話 水玉、くるり

クラコンの帰り道、ぺんちゃんとイヌはお互いに思い出話を語っていました。もうすぐぺんちゃんのアパートが見えてくるといとき、ぺんちゃんはぴたりと足を止め、イヌの方を向きました。そして大声でこう言ったのです。

「亀くんを助けに行くべひ！」

ぺんちゃんの声に驚いたイヌは、目をくるくるさせながら言いました。

「でも、亀くんのルーズさは並大抵のものじゃないわふ……」

ぺんちゃんは言葉をさえぎるように、イヌの顔を両ひれで挟みました。二匹のまるい目が四つ。街灯の光をキラキラと反射させています。

「やるしかないべき。このままじゃダメべい」

ぺんちゃんの真剣な様子にイヌは心を打たれました。

「わふ！」

ぺたりとお座りしてしつぽをぶるんぶるんと振ります。

「じゃあ、今日は作戦会議べひ」

ぺんちゃんのひれがアパートを指していました。

亀くんを助ける作戦会議は夜中行われました。

一番の問題は、亀くんが時間にルーズなことです。

「亀くんは小学校のときからマイペースだったわふ」

ぺんちゃんはひれを胸あたりでしっかり組んで、うんとうなります。

「遠足で山登りをしたときも、運動会のかけっこのときも、亀くんはいつも最後でゆっくり歩いていたわふ」

ぺんちゃんはテーブルの紙に、「歩く」と書きました。

「ご飯を食べるのも遅かったわふ」

ぺんちゃんは紙に、「食べる 遅い」と書きました。ぺんちゃんはその文字をじっと見つめながら言いました。

「何か亀くんの得意なことはないべひ？」

イヌはぐるぐるとうなりながら考えました。

「小学校以来だから分からないわふ……」

ぺんちゃんは鉛筆をもったまま、ひれをばたばたと上下に動かしました。その様子を見ながらイヌがつぶやきました。

「亀くんを助けるのは難しいと思うわふ……」

イヌはうつむいてカーペットの柄の水玉を目で追い始めました。イヌの目がくるつと円周をまわると、次の円へと動き、またくるり。すーっと動くと、また、くるり。すーつ、くるり。すーつ、くるり。

その様子を見ていたぺんちゃんは、イヌの頭をくちばしでつつきました。

ツツツツツツ。

「何するわふ?!」

イヌは前足の肉球で頭をおさえました。

「そんな弱気でどうするべき! イヌのばか!」

ぺんちゃんは部屋のとびらを開けて出て行きました。

「わふ?!」

驚いたイヌは後を追おうと急いで部屋を出ると、ぺんちゃんは玄関脇のトイレに入って行きました。

「……まぎらわしいわふ」

トイレから出てくると、ぺんちゃんは何事もなかったようにさわやかな調子で言いました。

「亀くんも沖縄出身べひ?」

イヌは前足の上にあごを乗せ、カーペットの上で丸まっていた。入ってきたぺんちゃんに視線だけをちらつと向けて言いました。

「そうわふ。でも、中学に入るとすぐ両親の仕事の関係で神奈川に引っ越したわふ」

「じゃあ、今は実家から通ってるべき?」

「くーん、今は学校の近くで一人暮らしのはずわふ」

ぺんちゃんはふてくされて元氣のないイヌのそばで、腹ばいになりました。イヌの長い鼻の前に、ぺんちゃんの長いくちばしがあります。

「じゃあ、何で遅刻するべひ? そんな近くに住んでるのに」

「亀くんのルーズさはどうやっても直せないからわふ」

部屋がしんとしました。ぺんちゃんも亀くんを救う良い方法が思いつかず、そのままカーペットの水玉を見つめました。目が動き始めます。

くるり。すーっ、くるり。すーっ、くるり。すーっ、くるり。

イヌも始めました。

くるり。すーっ、くるり。すーっ、くるり。すーっ、くるり。

そのときです。イヌがはっとした様子で首をあげました。

「そういえば、朝起きるのは得意って言ってたわふ」

ぺんちゃんは目をかっと開きました。しかし、ボウリングで疲れた体は起き上がることを許しません。目がゆっくり閉じていき、これではいけないと頑張っで見開くのですが、まただんだんとまぶたが閉じていきます。イヌが何やら話しかけているのですが、声がだんだんと遠くなっていきました。「そうわふ。……だったって言ってたわふ。じゃあ明日……して、……わふ。ぺんちゃんが……、わふわふわふ……わふわふ……わふわふわふ。」

徐々にイヌがわふわふ言っているようにしか聞こえなくなりました。

イヌはそのまましばらくしゃべっていました。が、ぺんちゃんが何も言わないので不思議に思っ顔を観き込みました。ぺんちゃんはしっかりと目を閉じて、スースーと寝息をたてています。

「ぺんちゃん疲れたわふか？ 寝るの早いわふ」

二匹はそのままカーペットの上で眠りました。そのときはもう夜が明けていて、カーテンの隙間から明るい黄色の光が差し込んでいました。

ぺんちゃんは会ったこともない亀くんと一緒に海を泳ぐ夢を見ていました。深く潜っていく二匹をイヌが羨ましがっている夢でした。

(つづく)



鳩山
×
一路

サブカル対談

第5回



私たち2人が
映画・小説・漫画等について
好き勝手に語ります。

第5回目のテーマは、古谷実『わにとかけぎす』です。

あらすじ

◆古谷実『わにとかけぎす』（ヤングマガジンコミックス、全四巻）

富岡ゆうじ（夜間警備員）は、三十二歳でようやく自分の人生が寂しいと気付く。そして、友達がほしいと願うのだが、彼の職場には死を予告する手紙が届いてしまう……。自分自身を変えようとしながら、友情や恋愛、さまざまなトラブルに翻弄されていく様を描いた、ユーモア・サスペンス。

鳩山…とりあえずどうだった？ 私は何もない三十二歳という設定、胸にせまるものがありました。三年前ぐらいに一回読んだんだけど、その時は感じなかったのにな。

一路…これまでの人生、何をしてたかって、眠り続けてたところからリアルだね。そういうことってありそうで怖い。

鳩山…そうそう！ ありそう！

一路…現実逃避って、眠ることから始まるような気がするもん。

鳩山…とりあえず友達作ろうって思うとかさ。私かよって感じたよ。

一路…流れ星に祈っちゃって。せつない。鳩山…かなり大げさな設定にはなってるけど、多かれ少なかれ、こんな焦燥感を持つてる人って多いんじゃないかな。

一路…うん。

鳩山…流れ星に祈るとか、微妙にキャラがかわいいよね。奇抜な話のようだけど、たとえばワンピースとかと比べれば、むしろ日常系系だよな？

一路…そうだね。日常の中にある非日常な出来事を描いてる。

鳩山…スタートは読者の共感を誘うところから入ってる感じで、それが非日常と交差する。

一路…同級生に嫌われてたとしても、主人公としては人と触れ合わないようになしてきたわけではないんだけど、大人になってから人と触れ合いたいと頑張ったら、逆にうまくいかないんだよね。「孤独にガブリとやられた」と表現されてたけど。

鳩山…トラブルがいろいろ起きてね。で

も結局かわいい彼女もできるわけで、総合的にはうまく行ったんじゃない？

一路…そうだね。最初読んだ時は、うまくいかなかったのかと思ったんだけど。最後、死んでしまう主人公っていう方向もあり得た、というか。どうなったのか分からないエンドかと思ってたけど、今回読み返すと、やっぱりハッピーエンドだなと思った。鳩山…うんうん、最後のどっちに転ぶかは紙一重なんだぞって終わり方が私は良いと思ったよ。

一路…そうだね。

鳩山…結局作者の中には、日常にはものすごい暴力が潜んでる、いつ誰がやられるかわからないって世界観があるんだよね。

一路…あーなるほど。

鳩山…一方で平凡で退屈な人生に対して辟易している自分もいて。

一路…うん。

鳩山…ほんとはそのふたつは矛盾してるよね？でもどっちも本当のことだよってことを私も考えたよ。

一路…そうだね。家族を作るっていうこと

とか、人生について考えていくこととか、自然な展開になってる。最初読んだときは、前半大きく展開して面白かったから後半つまらないように思えたけど、たぶん主人公の年齢に近付いた結果、後半もまとめて『わにとかげず』っていう作品として受け止められるようになりました(笑)個人的には、斎藤くんがいいキャラだと思う。鳩山…斎藤くん、いいね。

三十歳デビュー!?

鳩山…それにしても、友達欲しいって気づく三十歳、痛いほど共感したよ。

一路…三十歳デビューって感じてね。

鳩山…三十歳デビュー！いい言葉だね。

一路…高校デビューや大学デビューと比べて、三十歳デビューがでにくいって、何が違うんだろうね。

鳩山…三十歳デビューってでにくいのかな？ たしかにもうゴールにいなきや

いけないのに、いまさらデビューって感じ？

一路…もうゴールっていうのも寂しいけど、三十歳はデビューする場がないのかも。

鳩山…ゴールは言いすぎだけど、もうある程度人生生きてるわけで、環境がガラッと変わるわけでもないし、キャラをガラッと変えるのは難しいかもね。

一路…そうだよ。

鳩山…そういえば私もここ二年ぐらい、自分の性格を変えようって心底思ってるんだけど、全然変わらないよ。キャラを変える、みたいな軽い感じじゃなくて、性格って根深いものなんだなあと実感する日々です。

一路…性格のどこを変えるかによるんじゃないの？

鳩山…具体的に言うとなんか好きする性格になりたいっていう、まさにわにとかげぎすみたいな感じなんだけど。

一路…人に好かれる性格っていうこと？

鳩山…そうです。

一路…わにとかげぎすの主人公もさ、孤独

がいやだ、寂しいって思ったからこそ、友達にほしいって目的ができたわけ。なぜ人に好かれたいといけないのかってことを考えてみてはどうだろう？

鳩山…人生相談になってきたね！

一路…あはは、確かに（笑）

鳩山…それは人好きする人の方が人生得だっと思うからだよ。

一路…人生を損得で考えてはダメです！

（笑）

鳩山…職場の人に「人好きする性格になれ」って強く説教されたのが理由なんだけど…。そんなこと直接言われるって中々無い経験でしょ？ だから、それなりに心の底から性格を変えようって思ったんだよ。

一路…私から言わせるとね、それはやっぱり説教としては説得力に欠けると思うんだよ。

鳩山…そう？

一路…人好きするっていうことの意味をもっと考えなければ、解決方法が導けないと思うんだよ。

鳩山…おお！ 確かに！

一路…人好きするって、リアクションが見えるっていうか、危険じゃない感じが良いんだと思うけど。その人を受け入れてる感じとか。きつと過度なリアクションが必要わけじゃないんだけど。嫌な人でも笑ってあげないとね（笑）

鳩山…私もそう意識はしてるんだけど、根本的に他人への警戒心があって、それを隠しきれないというか、それが相手にも伝わって、相手からも遠慮されるということが多々あるんだよ。

一路…最初は誰でも警戒心があるんじゃないの？

鳩山…うーん。実際に、あなたは心を開いてない！ってセリフをいろんな人から言われるよ。

一路…でも、本人は開いているつもりなんだよね？

鳩山…うん。

一路…そこがねー、悩ましい（笑）どこを見てそう思ったかも含めて言っただけだよ。

鳩山…安めぐみも飯島愛に同じこと言わ

れて怒られてたよ。その時は確かに安めぐみが嘘っぽかったけどね。

一路…確かに、私も安めぐみの態度は感じ取りにくくて、その気持ち分かるかも。

鳩山…優等生的なんだろうね。えらい私の人生相談になってしまったけど、言いたいことは、こういう風に性格を変えようって思っても、中々簡単には行かないってことなんだよ。自分ってそれだけ根深いものなんだよなあって。

ふたりの自分

一路…主人公がタイプっていう美人の彼女が現れるって、すごい希望を与えるよね。

鳩山…古谷実のいつものパターンだよな。一路…そうなんだよね。毎回そう。

鳩山…おっぱい見せてって言ったらすぐに見せてくれるし、良い彼女なんだよね。『はちみつとクローバー』を読んだ時に思ったんだけど、漫画に出ている主人公と彼

女って、二人でひとつの人格なのかなって。ダメダメな自分と、そんな自分が大好きな自分。

一路…うん。確かに。

鳩山…がんばれ俺！好きだぞ俺！みたいな。でも何か良い感じだけどね、わにかげぎずのふたりは。

一路…彼女もそれなりにぶつとんとでるところがいい。これでまさにヒロインみたいな人をあてられたら、しつくりこないもん。

鳩山…裸でグラウンド走ったりね。小説の才能もあるし、魅力的なキャラだよな。古谷実の漫画はあっさりセックスするし、した後は日常に溶け込んで姿を現さないってところが、青春物とははつきり違う点だね。一路…確かにね。何と言うか、童貞を捨てる過程なのかも。

鳩山…うんうん。でもさ、童貞小説って感じともちよつと違うかなって。主人公は友達かほしかったのには、はからずも彼女ができたって感じで。童貞捨てたい、捨てたいって考えもないもんね。

一路…そうだね。何か突然うまくいきはじ

めるから、本当にその問題で悩んでる人にとっては助言にならない。

鳩山…そうそう。恋人も棚ぼたみたいなもんだもんね。相手に一方的に好かれるという。でもすぐにこっちも好きになっちゃう感じとかかわいくて良いけど。結局主人公の苦しみて何なのかな？

一路…何だろう。難しいね。

鳩山…一路さんはこの話のどういう点が好きだったの？

一路…日常と、それに隣り合わせになった非日常の事件があって、それが不自然じゃなくあるところが、現実的だなあと考えて、そこが一番好きなんだけど。主人公が孤独から救いだされる感じも読んで希望が持てるし、古谷実のシニールというか超現実的な作風が、現実を描いてるところが良い。どの作品もだいたい展開的に似ているけど、『わにとかけぎす』が一番きれいにまとまっている気がするんだよね。

鳩山…終わり方も良いしね。

一路…そう。少し暗いところも残しながらのハッピーエンドが、辛い経験は少しずつ

しか癒えていかないと思える。

鳩山… うんうん。でも前向きな要素もあるしね。結婚したり、子どもつくったりちゃんとしてるところとか。ヒミズは読んだ？

一路… うん、読んだよ。

鳩山… さっきの私の話で、人はなぜ生きるのか、何のために生きるのかって答えるのは難しいけど、他人には生きていてほしいって思うものだなんて思ってたね。

一路… あー、そうだね。それって良いことだね。

鳩山… うんうん。無責任に自分に生きてほしいって思ってくれる人がいるってことは良いことだよ。

一路… さっきの、主人公と彼女は、二人で一つの人格ってすごい分かるなと思って。あ、ちょっと違う方向にいつてる？（笑）

鳩山… いやいや、そういうことだよ。

一路… 合ってる？（笑）

鳩山… 合ってる！
一路… いつもエヴァンゲリオンを引き合いにだして悪いけど、エヴァのなかでNE

RVが進める人類補完計画って、一人ずつだと孤独で寂しくて、それをもう一緒にしてしまっって補完することで完全な自己になるっていうことだったんだよ。

鳩山… 他人と人格を融合させるってこと？

一路… そう。他者がいるから、摩擦が起って辛い。人類全てを融合してしまっって一つになっしまえば、もう辛くないってこと。でも、最終的に、アスカがシンジを拒否することで、世界に二人だけが残っしまうの。

鳩山… 結局統合できないものが残るんだ。

一路… そう。

鳩山… 「自己とは統一されない二つの心のことだ」って昔言われたことを思い出したよ。矛盾Ⅱ自分って話で、アスカの存在と同じようなことだと思っただけ、摩擦Ⅱ存在意義というか、統合されないからこそ自分なんだってことを教えてもらったんだよね。

一路… 結局、物語の主人公と彼女は、相互補完関係として描かれることが多いけど、

摩擦が残らないと面白くないというか、現実的じゃないような気がする。 だけど、人って補完される存在を求め続けるんだよねえ。自分も、自分だけじゃ完結しないし。

鳩山… ただ、こういう漫画の恋人同士を見ていると、自分が自分を愛する過程のように見えるからこそ、両想いになって、ちゃんと自分が自分を愛するようになるってことが、すごく良いことに感じるんだよね。他人とどういう関わりを持つか、現実にもこういう出来事があったかっていう問題もあるし、それと濃密に運動はしてると思うんだけど、個人の作業として、自分と向き合うとか自分を受け入れるみたいなことはあるよね。なぜ生きるのか？生きていくことに意味はあるのか？生きていくと他人事みたいになってほしいって思う自分。それが完璧に統合されることはなくとも、矛盾を抱えながら、二つの自分が折り合いをつけていくっていうのが、生きる過程なのかなと思いました。

クラシック音楽・教養のお時間

天沼 太郎

第2回 記憶の中の演奏会

眠気は一瞬にして吹き飛んだ。これは一体何なのだ！目の前には100人近いオーケストラ団員*1が並び各員の楽器を奏でている。けれどその音楽は、私の知っている楽器の音ではなく・・・。

* * *

もう10年近く前の話である。生まれて初めての個人旅行にドイツを選んだ。目的はもちろんクラシック音楽*2の本場ドイツ*3で演奏を聴くためである。しかし、なにぶん初めての個人旅行。アドバイスしてくれる人もなく、旅行会社を通じて航空券とホテルを予約することだけで精一杯。演奏会情報を調べ始めたのは出発のやっと一週間前。見つけたベルリン・フィル*4のサイトでは、なんと最終日を除いてチケット完売*6。仕方ないので、公演最終日のチケットを購入。まだ見ぬ会場でチケットを受け取るという不安一杯の旅立ちとなった。

チケットは一枚しか準備出来なかったけれど、運良く現地ベルリンで、キャンセル券*7を購入することができた。お目当てのベルリン・フィルの公演は都合2回を聴けることとなった。

本場で聴くベルリン・フィルは、確かに世界最高のオーケストラという音がした。当時、まるでシンセサイザーと評している人がいたが、冷たく透明で、厳格にコントロールされたその音はとても人間の奏でられる音とは思えず、これまで聴いてきたどのオーケストラとも隔絶していた。けれど、その音が時折非人間的に聞こえる。それが少々気になった*8。

事件はその翌日。2回目の公演の数時間前に演奏会会場を通りかかったところ*9、何故か人だかりがしている。そこは個人旅行のいいところ、面白いことでもやっているのかと早速近づいてみる。すると、ベルリン交響楽団*10なる団体の日曜コンサート？があるという。1週間もドイツに滞在して、たった2公演（それも同じ演目）しか聴けないのも何なので、知らないオーケストラでも構わないかと早速チケットを購入。安い料金で結構いい席を取ることができた。

演奏会のプログラムは、シューマン*11の序曲、ブルッフ*12の「ヴァイオリンとビオラのための協奏曲」、ブラームス*13の交響曲第2番。最初の2曲は初めて聞くマイナー曲。最後のブラームスのみ有名曲。昨晚聞いたベルリン・フィルが頭にあり、一流のオーケストラと二流のオーケストラではどれほどの違いがあるのだろうか、なんとも偉そうな思いで演奏会に臨んだ。

シャンバダールという曙を縦も横も半分にサイズダウンしたような指揮者が現れ、演奏会は始まった。ところが、これがひどい演奏。シューマンの序曲は楽器の音が揃わない。練習が足りない典型のような代物。無名オーケストラだけに、台所事情は厳しいのだろうな、練習の時間も取れないのだろうなと考える。

二曲目は協奏曲。ヴァイオリンとビオラの奏者が壇上に現れる。ヴァイオリンの奏者が、黒いドレスの上に鮮やかな赤いボレロを羽織っていて、それが目に映えたのを覚えている。

演奏が始まってすぐ、眠気が吹き飛んだ。楽器の音がしていない！

もちろん、別に音が鳴ってないわけではない。個々の楽器の音が他の楽器の音と完全に溶け合い、まるで一つの楽器のように鳴っている。これまで確かに、「楽器の音が溶け合った素晴らしい演奏」という言葉を聴いたことはある。けれど、物理的にそんな演奏が可能とは思っていなかった。

先ほどいい加減演奏を聞いたばかりである。何かの間違いではないかと、じっと曲に聞き入った。さっきとは全く別の団体かと思われる演奏。オケの音量は上下するが、一糸乱れぬそのアンサンブルは、オーケストラがまるで生き物のようについに聞こえる。静かな部分はもちろん、音量が上がるところも全員の音がピタリと揃っている。驚いたことに、音が膨らんだ(大きくなった)ところでも、独奏者の音がかき消されない。弱音から強音の幅が非常に細かく設定されているのだろう。小さい音からゆっくり音量が増した場合、実際にはそれほど大きな音でなくても、人には大きな音に聞こえる。その技を使えば、独唱者の音を遮ることなく、強い音も使えるテクニックである。とても二流のオーケストラの使える技ではない。「キレイに音揃えてます」というわざとらしさがないのもたまらない。

音量の調整だけではない、一楽章の華やかな音楽に続く二楽章では、今にも壊れてしまいそうな、はかなく崩れんばかりの、か弱く美しいメロディーがずっと続く。この演奏が終わって欲しくない、永遠に続いて欲しい。叶うはずもない願いが天に届くはずもなく、5分ほどの2楽章は終わり、最終楽章に入る。ここでもオーケストラは一つになって夢のような音楽を奏でる。オーケストラは一体となったまま、自然に自然に曲は流れていく。そんな演奏が存在し、しかもそれを(失礼ながら)この二流のオーケストラで体験できるなんて考えもしなかった！

演奏が終わって20分ほどの休憩時間となる。休憩時間のことはよく覚えていない。さっきの演奏の興奮で、ぼおっとなっていたと思う。今のあの体験は一体何だったのだろう。

演奏会最後の曲、ブラームスは、最初の曲と同じく手抜き演奏。しかし、2曲目にあんなにすごい演奏をしてくれたのなら何も文句はない。たった20分強の曲ながら、生涯頭から離れることのない演奏になるのだから*14。

その日の晩は、2回目となるベルリン・フィルの演奏会だった。しかし、昼に聴いた演奏とは比較にならなかった*15。一体どこが違ったのだろうか？

* * *

演奏会を聴いた次の年、ベルリン交響楽団が破産したというニュースを聞いた。自主再建を目指すとも書いてあり、実際その数年後ベルリン交響楽団は復活した。更にその後、横浜で同オーケストラの演奏会があることを知った。出かけようと思ったけれど、プログラムはドボルザーク「新世界より」とベートーヴェン「運命」。客の呼べそうな安っぽいプログラムを見て、とてもあの時のような体験は期待できそうにないと思い、出かけず。

また、あの演奏会以降ずっと探していたブルッフ「ヴァイオリンとビオラのための協奏曲」のCDをネットで見つた。マイナーな曲だったので、結構苦労して見つけたそのCDは、なんとそのベルリン交響楽団のものだった。しかしながら、その録音は、あの演奏会の数年前のもの。オーケストラがまだあの曲を自分たちのものとしておらず、到底あの時の演奏を思い起こされるものではなかった。あるいは、録音*17のせいかもしれない。

いずれにせよ、あの演奏会のことは忘れられない。

- * 1：普通の演奏会では、オーケストラの人数は約100人。古い時代の作品(例えばモーツァルト)だと100人を下回り、20世紀に近づくと100人を越える演奏者が必要になる。グスタフ・マーラーの交響曲第8番は、初演時の演奏家が1000人を超え、「千人の交響曲」と呼ばれる。
- * 2：クラシック音楽の定義は難しい。17～19世紀に主にヨーロッパで作られた音楽と定義すればあんまり間違いはないけれど、それからはみ出すクラシックもいっぱいある。
- * 3：クラシックの本場としては、イタリア、ドイツ、フランス、そしてオーストラリア(ウィーン)がある。
- * 4：ドイツのベルリンにある名実ともに世界最高のコンサート・オーケストラ。もとは酒場のオーケストラであったが、若いメンバーが独立して1882年に結成された。なお、一般に、オーケストラにはコンサート・オーケストラとオペラを主に演奏するオーケストラ*5がある。ヴァイオリニストの榎本大進が、コンサート・マスターを務める。2012年には、佐渡裕が定期演奏会に登場した。
- * 5：オペラハウスを活動拠点にするオーケストラとして、ウィーン・フィルが有名。毎年1月1日夜のNHK(Eテレ)で行われるニューイヤーコンサートが有名。ただし、オペラを演奏する際は、ウィーン国立歌劇場管弦楽団と名乗っている。二つの団体で、メンバーは若干違うらしい。
- * 6：普通のオーケストラでは、年10回ほどの定期演奏会を行う。1回の定期演奏会は同じプログラムで、連続して2、3回の公演を行う。通になると、安い席のチケットを買い、同じプログラムであってもできるだけ多くの公演に行くという。演奏会には出来不出来があり、3公演行って当たりが一回だけということもあるからだそうである。
- * 7：普通、演奏会会場の開場約1時間前に、キャンセル分のチケットが発売される。人気のある公演の場合、朝早くからキャンセル待ちの列ができるそう。
- * 8：典型的な素人感想。自分では理解できなけれど、もしかしてそれが正しいあり方なのかな？と疑問を持っている。一般に権威に弱いと言われる態度である。
- * 9：ベルリン・フィルハーモニー・ホールそばにある美術館「絵画館」のこと。フェルメールの絵も展示されている。ベルリンやヨーロッパの主要都市には(当たり前ながら)各種美術館博物館がある。それらの共通チケットが売られており、それを持って回ると非常に便利。
- * 10：ベルリンにある演奏団体。有名オーケストラのベルリン・フィルに隠れて、ほとんど無名。一時期破産して解散。近年復活した。
- * 11：ロベルト・シューマン(1810-1856)。ドイツの作曲家。ロマン派に分類される。トロイメライが特に有名だけど、4つの交響曲、ピアノ協奏曲など、あらゆるジャンルに作品を残している。晩年は、梅毒による精神生涯が悪化、ライン川へ身を投げるなどしたため、病院に収容される。残された妻のクララ・シューマンは才女ピアニストとして有名。
- * 12：マックス・ブルッフ(1838-1920)、ドイツの作曲家。ドイツ人らしからぬ？メロディーの綺麗な曲を残しているけれど、ヴァイオリン協奏曲(第一番)とスコットランド幻想曲しか知られていない。交響曲、合唱曲、オペラなど多くの作品が演奏されずに忘れられたようになっているが、これは第2次大戦中に、ナチス政府から(ブルッフがユダヤ人であると疑われ)、演奏を禁止されたことが大きい。
- * 13：ヨハネス・ブラームス(1833-1897)、ドイツの作曲家。勤勉を絵に書いたような作曲家。いろいろな名曲を残しているが、4曲ある交響曲はどれも聴く価値あり。形式を犠牲にして作曲家の思いの丈を縷縷と綴るロマン派的音楽に異を唱え、均整のとれた曲(古典主義的な曲)を作曲したことから、新古典派と呼ばれる。
- * 14：素晴らしい演奏会は忘れない。衝撃的な体験は、そうそう忘れられないものである。問題は、衝撃が大きすぎ、記憶に脚色が入ってしまうこと。「あの時はよかった」などという言葉は、大体美化されているものである。
- * 15：この時の演奏会が、不出来な演奏会だったかどうか分からない。どんなに実力のあるオーケストラでも不出来なことはあるし、指揮者に問題がある場合もある。そして、聴く人間の体調によっても感じは変わるものである。
- * 16：演奏会(だけではないけれど)の録音は難しい。噂では、ワンポイント録音*17といってマイクをたった一つ用いる録音法が比較的いいらしい。ただ、どこで録音するか、その一点を見つけるのが大変とか。
- * 17：アンドレ・シャルラン(1903-1983)といって、ワンポイント録音の鬼のような人がいた。しかし、あまりの偏屈ぶりに晩年は不遇をかこち、その貴重な録音は差し押さえられ、海に投棄されたという(Web「クラシック音楽へのおさそい」参照)。



僕は空気が読めない

一路真実

1

人生には、ライフステージというものがある。ある特定の年齢に差しかかると、皆が自然とそのステージをこなす。例えば、入学。入学したら、卒業。次は、就職、結婚、というように。同じ年代の人たちが、ステージという名のハードルをうまく飛び越えて行く。

僕もそうだった。……あの日までは。

いや、具体的に「あの日」があった訳ではない。気付いたら、周りの皆が僕のことを攻撃するような瞳で見つめていた。

そう、おそらく徐々に変化していたのだ。他の人が次々に渡っていく橋の下で、いつの間にかその橋を眺める側になっていた。地面に落ちた薄暗い影が知らない間にどんどん近寄ってきている。ふと振り返ると、辺り一面に増殖したその影が、もう身体ごと飲み込もうと口を大きく開けて待っていたのだった。

「健人、お前また部長に飲みに誘われてただろ。やっぱり仕事できる奴は違うよなあ」

同期入社の桑原がまるで労うように、森永健人の肩を軽く揉んだ。健人は振り返り、
「たまたま部長と帰社時間が重なっただけだよ。今度誘われたらお前にも声掛けるよ」
と苦笑いのようなはにかんだ笑顔を作った。

「助かるよ。さすが、同期のエース」

と、持ち上げてくる桑原を横目に、
(なんて、部長が帰るタイミングを計ってたんだけどね。他人を頼りにしててもだめだぜ)
と、内心ほくそ笑んだ。

幼い頃から、健人は何でもできた。周りに少し気を配るだけで、面白いように他人の心が読める。小学校の学芸会では皆が健人を主役に推薦する。合唱コンクールでは健人が指揮。運動会では応援団長。生徒会長だってそう。勉強でも、スポーツでも、何でも気付けばトップだった。特別なことをしているわけではない。自然と健人の周りに人が集まって来た。挫折して社会に対して斜に構える同級生を飛び越えて、健人は次から次へとステージをクリアしていく。自分の人生に笑いが止まらなかった。

「森永健人。森の中でも永遠に健康でいられる人って覚えてね」

大学生のときに行った合コンの自己紹介でそう言うと、女の子たちはきゃっきゃと笑い声をあげて、甘ったるい瞳で健人を見つめてきた。

「外国でも通用するようになって、将来を見越してケントって名付けられたんだ」

向かいに座っていた、いかにも女子アナウンサーが着そうな、淡いピンク色をしたニットのアンサンブルの女の子が目を合わせてほほ笑んだ。

「堅実なご両親に育てられたんですね」

上品な顔立ちで、周りから守られて育ったような香織を、健人は一目で気に入り、付き合いが始まった。香織は近くの女子大に通っていた。中学校から大学までずっと女子に囲まれたお嬢様で、父親が勤める銀行にそのまま難なく就職した。そして、大手商社に入社した健人に、働き始めて三年ほど経った頃、両親に会うようにとやんわり催促し始めたのだった。

「もったいないと思わないの。お前だったら、かわいい女の子とまだまだいっぱい遊べるだろう」

と桑原は言うが、健人にあまりその気はなかった。健人にとっては、結婚という次のステージが待っているのだ。遊んで時間を使っている場合ではない。皆より先に、誰もが羨むような形でステージをクリアしなければならない。乗り越えなければ、という使命感の方が勝っていた。

そんなある日のことだった。昼休みに社内にあるレストランに行くと、同期が集まっている輪が見えた。健人が現れると、大声で笑っていた同期が振り返り、涙目で訴える。

「高橋が面白いんだよ」

「またか、何だよ」

「うちの課長の大岩ってメタボってんだろ。あいつがロッカーの裏側に落ちてたアイドルの写真を取ろうとして、隙間に挟まったんだよ」

高橋が顔を膨らませ、大岩の真似をしながらロッカーに挟まる滑稽な動きをすると、同期の皆がまたどわっと笑った。

「ふうん」

「おい、ふうんじゃないよ。面白いだろ」

健人がきょとんとした顔をしていたので、皆の顔からも少しずつ笑いが消えていった。

「ああ、そうだな。面白い」

慌てて健人が作り笑いをすると、皆がまた思い出したようにわっと笑った。

健人はすぐにその場を離れた。何かおかしい。今までは、同期と一緒にいたらどんなことでも笑えたはずだ。しかし今日は、一向に面白くない。皆がなぜ笑っているのか全く分からないのだ。後を追って来た桑原が健人の肩を組んだ。

「珍しいな、お前が笑いを外すなんて。いつものお前なら、もうひとつ持ちネタをかぶせて笑いを持って行くところだろ」

健人は愛想笑いを浮かべた。

「ああ、悪い。今日調子悪いみたいだな」

変に歪んだ口元を見て、桑原は少し不信に思った。

昼過ぎから会議が始まった。健人は新たな企画書を発表する予定になっている。事前に上司にも目を通してもらい、会議に出席予定の社員を全て調べ、それとなく話をしておくほど、根回しも完璧であった。

あと数人で健人の番というところで、資料を映し出しているプロジェクターが目に留まった。プロジェクターから壁に向かって這っているコードの絡まりがどうしようもなく気になる。すぐさま席を立ち、床へ這いつくばるようにして、少し引っ張った。すると今度は、視界の端に入ってきたスピーカーから出ているケーブルが気になり始めた。床をほふく前進のようにして少し移動し、ケーブルの丸まりを伸ばしていく。健人に気付いた先輩が小声で囁いた。

「おい、次、お前の番だろ。準備しろよ。何やってんだ」

顔を上げると、健人の前の番だった同僚のプレゼンが終わり、マイクを持った上司が講評をしていた。そのマイクから出たコードの歪みが気になり、健人は話している上司に近付き、コードを伸ばし始めた。

「森永君、何をやってるのかね」

苦笑いだった上司の反応を見て、会議に出席している社員たちもくすくすと笑った。しかし、あまりにも上司の周りを健人が離れず、終いにはマイクを奪い取ってコードを引っ張り始めた。異変を察した社員がざわつき始めた。上司が大声で

「森永君！ 席に着きなさい！」

と叫ぶ。しかし、健人は一瞥もくれずコードばかりをしきりに触っている。周りに座っていた男性社員が健人の体を掴み、無理やりマイクから引き剥がした。

社員は冷やかな目で健人を見ていたが、健人はなぜ皆が自分の体を押さえつけたのか理解ができなかった。そして、そのままプレゼンの番が来ることもなく、健人は会議室を放り出されたのだった。

健人の奇行は社内で噂になった。それまで健人を崇めたてまつっていた同期も、スターの悪い噂に反応して、次第に健人の悪口を言い始めた。

「森永って、例の企画書を会議前に出席者全員に確認とったらしいぜ」

「うわー、細かいやつだね。企画書で勝負できないわけ？ 人間が小さいわ」

「彼女ともうすぐ結婚だろ。しかもいかにも純粋って書いて貼ったような彼女」

「うちみたいな大手に入社する男なら、嫌なところがあっても目つぶって付き合うんじゃないの。じわじわ結婚迫られたっていうし、彼女もしたたかだろ」

「良いカップルを装って、内側は計算だらけで気が抜けないってか」

「あいつ、何でもできるらしいけど、逆に森永と言えばこれみたいなものがないんじゃない？」

「まあ、友達に一人いると便利だけど、いなくても気付かないってタイプだな」

「あいつ、何が楽しくて生きてんのかな？」

「さあ」

当の本人も社内で噂になっていることは分かっていた。せつかく準備した企画書もプレゼンさせてもらえず、通らなかったことに悔しさを感じていた。しかし、逆に皆がなぜコードの歪みを

気にせずにいられるのか、信じられなかった。放っておいて会議を進行させる方が悪いことのように感じた。

よく晴れた日曜日、ホースから飛び出した水しぶきが光を撒き散らしながら、黒光りした車に体当たりしていく。健人はタオルを握り、いつもより念入りに愛車のボディを拭いた。

今日は、香織の両親に挨拶に行く日だ。

「うちのお父さん、礼儀には厳しいから、絶対遅刻しないでね。あと、服装もチェックしてるから気を抜かないで。まあ、いつもの健人くんなら心配いらないけど」

香織はそう言っていたので、健人は出発の二時間も前からばっちり準備していた。手土産も一週間前から買っておいたし、事前に実家の地図を受け取って下見に行ったから迷うこともない。

窓ガラスに映る健人の顔が少し歪んでいる。よく見ると、拭いたはずの部分が少し汚れている気がする。力を入れてタオルを押しつける。汚れが取れたと思ったら、今度は隣の窓がなぜか汚れている。数分前に拭いた場所が、またすぐ汚れていくような気がする。健人はタオルとホースを持ち、またぐるぐると車の周りを回り始めた。

突然、携帯電話がピリピリと鳴った。はっとし、通話ボタンを押すと、香織が

「健人くん？ 今日、十一時って約束だったでしょ。今どこ？」

と、早口でまくしたてた。慌てて腕時計を見ると、もう三十分も過ぎていた。

急いで部屋に入ると、ぶすつとした香織の父親が広い居間にあぐらをかいて座っている。引きつったような笑顔を見せる母親と父親の顔を窺っておろおろする香織がいた。

「大変遅くなりまして、申し訳ありませんでした」

香織の父親は眉間に皺を寄せたまま、微動だにしない。健人は、聞こえなかったのかと思い、もう一度大きな声で繰り返した。

「大変遅くなりまし……」

「もういい」

香織の父親が低く鋭い声で遮った。香織が傍に寄って来て、健人の腕に触れた。じっと目を見つめ、首を横に振る。健人は思った。

今、要求されているのはこの言葉ではないのだ。遅くなったことではなく、今日の要件の方なのだ、と。

健人は再び威勢よく

「娘さんを僕に……」

言い始めると同時に、香織はもちろん皆が凍りつき、父親がそれより上回る大きな声で言った。

「時間も守れない。それでよくそんなことが言えるな」

「お父さん、健人さんは時間を間違っただけよ」

香織が助け舟を出したにも関わらず、健人は前のめりになった。

「いや、時間は分かっていました」

香織ははっとして健人の腕から手を離し、後ろへ下がった。

「自分でもよく分かりませんが、気付いたら時間が経っていたとしか言いようがありません」

健人は正直に話したつもりだったが、香織の父親は大きくため息をつき、立ち上がった。

「話にならんな」

そう呟くと、縁側へと向かい、庭のつっかけを履いた。隅に置かれた棚の盆栽の様子を一鉢ずつ見ている。香織と母親は困ったことになったと互いの顔を見合わせたが、父親の行動をただ見守るしかできなかった。

健人は父親に近付こうと、慌てて庭に出た。健人が盆栽に近づくと、父親は逃げるように向きを変え、ホースから水を出し、隣に生えている植木にかけ始めた。健人は父親の持つホースが庭を縦横無尽に暴れまわるのが気になり、うねるホースを手にとって、伸ばし始めた。

「健人さん、何してるのかしら……」

母親が口の端を下げながら不信そうに見つめる。健人はホースと格闘していた。引っ張ったり強く押さえたりするので、ホースの口から出る水流が安定しない。突然勢い良く出たかと思うと、次には細い糸ほどの水が出るだけだ。静かな口調で話していた父親も痺れを切らし、思わず周囲に響くような声で叫んだ。

「いい加減にしないか！」

驚いた健人の手から握っていたホースが離れ、せき止められた水が一気に放出された。ホースの先が突然命を与えられたかのように勢いをつけて弾み、父親の手から逃げ出した。その瞬間、大量の水が父親の顔に向かって襲いかかった。

水を吐き出しても、なお暴れまわるホースの口を捕まえようとして、健人が上を跨ごうと足を伸ばした。内部を蛇が這ったようにホースがぐにやりとよじれた。上げた片足のつま先が、思いがけず引っかかる。香織の悲鳴が上がった。健人はよろめきながら、頭から盆栽の棚に突っ込み、几帳面に整頓されていた盆栽が滴る水のように落下していく。そして、全ての鉢が次々に割れていった。

思い切り水を浴び、額に貼りついた髪から大量の滴をしたたらせ、父親はわなわなと震えた。

「お前は、どうしてそんなに空気が読めないんだ」

健人は振りかぶった泥を落とすことなく、家からつまみ出されたのであった。

健人は分からなかった。相手に敵意を持っているわけでも、誰かの邪魔をしようとしているわけでもないのだ。ただ、普通に過ごしているだけなのに、何をやっても全てが裏目に出してしまう。自分自身の何が悪いのか分からない。どう変えていいのかも分からない。

何度電話をしても香織は出てくれない。毎朝日課のようにコールを鳴らす。朝起きてから一度、職場に着いてから一度。何度鳴らしても香織は声を聞かせてくれなかった。出社時にまた鳴らし、スーツの胸ポケットに携帯電話をしまうと、健人は挨拶をしながら部屋に入った。桑原と目が合ったので、声をかけようと近付くと、すっと目を逸らされた。

「どうしたんだよ」

桑原は周りの目を気にするように、健人の後ろへ回り込み、そっと耳打ちした。

「香織ちゃんが怖がってたよ。お前が何か変だって」

「変って何だよ」

「お前、変わったな。同僚の目、見てみろよ」

白く無機質な部屋に集まった、黒い人が一斉に健人を見ているような気がした。どの人の顔も、真っ黒で同じように見える。ドアから入って来た、同じような黒い人物がホワイトボードに張り紙をした。黒い人が一斉にそれに群がる。けたたましい音がしたかと思うと、すぐに鳴りやんで辺りは静寂に包まれた。黒い人ばかりが一斉に健人を振り返る。張り紙へと繋がる一本の道筋が出来ていた。

桑原が背中を押す。健人は張り紙の前に立った。

「異動だってさ」

そこには、健人の名前が書かれていた。

エレベーターのドアが開くと同時に、割腹のいい中年男性が出迎えてくれた。

「どうも。酒井です」

「地下にも執務室があったなんて、知りませんでした。てっきり物置部屋だと……」

蛍光灯が半分しか点いていない暗い廊下に、酒井の大きな笑い声が響き渡った。

「まあ、物置みたいなものですよ。うちの課はね、厄介ものが集まる場所ですから」

「え？」

廊下は微かにカビの匂いがする。のしのしと歩く酒井の広い背中は、なぜか皺だらけだ。廊下の奥にあるドアの前で、酒井は立ち止まった。木製のドアは会社に相応しくなく、まるで洋館に備え付けられた年代物の扉のようだ。メッキのドアノブも所々が剥げ落ち茶色に染まっている。酒井は勢いよく、ドアを開いた。

中にいる人たちは先ほどの黒い人とは違い、皆に色が付いて見えた。狭い部屋のなかで、それぞれが交わることなくうごめいている。ソバージュヘアの小さな中年女性が健人に向かって話しながら近付いてきた。

「ちょうどあんたくらいの息子がいるんだけど、ロックミュージシャンになるつつって家出て行ったわけよ。昔はさ、こーんなに小さくてかわいい時代もあって、そうそうこんな色したおもち

やを片手に、遊んでってまわりついてきて……」

健人が、相槌を打とうとすると、酒井が腕を引っ張った。

「近藤さんはいつもあの調子で一人で喋ってるから、放つといて大丈夫。本人は会話してる意識ないから」

健人が通り過ぎる時、突然奇声が上がった。男は資料を片手に、突然電卓をたたき始めた。覗きこむと、男が熱心に見ていた資料は白紙だ。健人の視線に気付く、男は振り返ると、

「その時計、いくら？ スーツは？ 鞆は？ 財布にいくら入ってるの？」

と矢継ぎ早に聞いてきた。右手は電卓をたたき続けている。立ち止まる健人を酒井は後ろから押した。男はまた奇声を発し、定規で机の長さを計り、隣の席にいた女性に

「身長は何センチ？ スカートの丈は？ 前髪の長さは？」

と聞き始めた。隣にいた女性は何も答えず、パソコンに文字を入力している。画面を横目に見て、健人は驚いた。彼女は、おしゃべりな中年女性や電卓の男など、部屋に響く全ての言葉を一言一句漏らさず書き留め続けていたのだ。

奥の黒い革の椅子に座っていた男が立ち上がり、健人の方へ向かって来た。高級なスーツに、磨かれた革靴を履いている。この人が課長だと健人は一目で分かった。酒井が言った。

「今日からこちらに配属になった森永さんです」

「森永健人と申します。よろしくお願いします」

頭を下げた健人に、男は何も言わず深々と頭を下げた。そして、そのままドアの方へ歩いて行き、ドア横のコーヒーマーカー近くにあった砂糖を左手に取りだし、右手でつまみ、額まで持ち上げると、近くのゴミ箱に投げ入れた。そして、また健人の方へ戻って来た。酒井が、

「課長」

と声をかけると、男は

「静かに」

と小声で囁き、また健人へ深々と一礼した。そして、革の椅子へと戻り、動かなくなった。一点を見つめ、騒がしい部屋の物音に対してじっと耳を傾けている。その一連の行為は、まるで焼香をしているようだった。周りが斎場であれば、彼は自然と馴染んでいただろう。しかし、ここは地下の執務室で、その行為は不適切であった。他の者たちも皆そうだった。どこかが違う。人間を構成するいくつものネジは正常に作動していたが、ある一つだけがどうしても合わない。その一つが異質であるがために、全てが崩れ落ちていく。そんな感じだった。

「森永さん。TPO不適性症候群って知っていますか」

「……いいえ」

「精神的な病気の一つなんですけど、突然発症するんです。その場に合わない行動を取り始めてしまい、周りの人とうまくコミュニケーションが取れなくなる。そんな病気です。ここに集められた人たちは、皆その病気だと診断されているんですよ」

酒井は、汗で落ちてくる眼鏡をあげながら、にこやかに語った。その笑顔は彼の意思に反して誰かが仮面を貼りつけていったようで、垂れ下った目の奥の本心は笑っていなかった。

「僕もその病気にかかってしまったということですか」

酒井は何も言わなかった。ずっと笑顔が消えたかと思うと、突然その場に腰をおろし、ネクタイを外した。

「酒井さん？」

そしてスーツの上着を脱ぐと、それを丸めて枕がわりにして横になり、居眠りを始めた。ここが彼の自宅だったら、気にならなかったであろう。そんなところで寝ちゃだめよと奥さんに言われながら、少しだけだからと眠る。そういう家庭の映像が見えてくる。しかし、ここは職場で、酒井さんの寝ころんだ床は畳ではなく、碁盤の目になっている冷たいタイルだった。

部屋の人たちを見回すと、皆が思い思いに動き回っている。それはまるで何かを演じているように見え、後ろの風景が違えば、彼らは自然と溶け込めたのではないかと思える。切り取られた場面が職場であったがために、彼らはつまはじきにされ、この執務室へ集められたのだ。場所、人の配置、行動。彼らが欲している場面は、ここではないどこかであった。

（周りから見れば、俺もこう見えているのか……？）

健人は、部屋を飛び出した。

「僕は、TPO不適性症候群なのでしょうか」

白衣を着た先生が、丸い椅子をくるりと回した。診察室は、刺激を与えないように真っ白に塗り固められている。先生はパソコンに表示された電子カルテに入力しながら、

「それを判定するために、これから少しテストをしてもらいます。あまり気負い過ぎずに回答してください」

と言い、健人に薄い冊子を手渡した。

設問は至ってシンプルなものばかりだった。

「あなたは、周りが大笑いしている時に、面白さが分からなかったことがありますか？」

「あなたは、今やっていることに夢中で、他人が話しかけてきたことに気付かなかったことがありますか？」

「あなたは、他人と意見が異なる時、どんな態度をとりますか？」

こんな設問で何が分かるのだろうと思いながら、健人はすらすらと答えを記入していった。

冊子を提出してから、しばらく待合室で待った後、健人は再び診察室へと呼ばれた。先生は相変わらず電子カルテの方ばかりを見て、健人と目を合わせない。そして、ゆっくりと言葉を選ぶようにして語り始めた。

「結論から言いますと、森永さんの症状はTPO不適性症候群ではありません。森永さんには、状況を把握する力や周りを見る力が備わっているという判断ができます。TPO不適性症候群の患者が持つような、他人との相互行為を拒否し、周囲の輪を乱すような行為、つまり、身勝手な行動という意味ですけれども、そうした行動特性が高いとまでは言えません。よく似ていますが、別の症状だと考えられます」

大きな塊が喉を落ちていく。先生が黙ったその一瞬、健人はまるで審判を下される囚人のようだった。

「森永さんは、役割固執病だと考えられます」

「役割固執病？」

「ある特定の定型パターンの行動を身につけすぎてしまったことにより、場面が変わってもその定型行動をとってしまう病気のことです。行動に合う場面にいたら、それは何ら問題にはなりません。そこがTPO不適性症候群とは違うところです。TPO不適性症候群の場合は、定型パターンなく行動を取り始めてしまいますから。しかし、この二つは良く似ていて、診断する医師によっては全てをTPO不適性症候群と診断する場合があります」

健人が茫然としているのに気付き、医師はようやく健人の方を向いた。

「森永さん、そんなに心配することはありませんよ。役割固執病はその病気の特徴を掴めば、普通に生活できますし、むしろこの病気を利用してお金儲けをしている人だっているんですから」

明るく真っ白な診察室によって、先生や看護師は色がなく、話す言葉がどんなに残酷であっても透明で中立に思えるようにしているのだと健人は思った。先生は、電子カルテを閉じると、インターネットから黒く塗られたサイトを開き、健人に説明し始めた。

「これは、とある転職サイトです。例えばこれを見てください」

不定期の仕事です、と書かれた記事を見ると、仕事内容には「葬式の参列」と記載されていた。

「近年は、親類が少ない人や名誉ある方など、葬式の参列者を増やさないといけない需要があるようなんですよ。以前、ここに診察に来た女性に、大声で泣き叫んでしまうという行動特性を持った方がいました。その方にはこの仕事がぴったりでしょう」

健人はふと地下室で焼香をあげ続ける課長の姿を思い出した。

「その特性が活かせる人を知っています」

「行動特性が定型でないといけないので、まずは診察を勧めてください」

心なしか先生がにやりと笑った気がした。

「他にこんな仕事もありますよ。レストランの注文係や電車で人を押しこめる仕事」

「えっ、それは普通の仕事ですよ？」

「そういう行動特性を持った人がいるんですよ。どこにいても、ウェイトレスのように人に注文を聞きたがる人や箱を見るとぎゅうぎゅうに物を詰めたくなる人なんかがね」

そうすると、先生はにこやかに笑い、優しい口調で画面を指差した。

「森永さんには、この仕事などどうでしょうか。僕が推薦状を書くと、給料が何パーセントかアップしますよ」

それ以来、健人はあの地下の執務室へ通いながらも、時折、先生から紹介された仕事をしている。それは、引越し業者と組んで、電化製品の配線を整える仕事であるが、副収入としてはなかなか良い額をもらっている。

おそらくあのクリニックは、転職サイトに出た求人情報の中から、それに見合う患者を紹介することで、仲介手数料をもらっているに違いない。しかし、それで救われる人もいるのだ。現に、健人もようやく自分の居場所を見つけることができ、お金を稼ぐことだってできている。

しかし、健人は時々考える。

本当に自分は空気が読めない人なのだろうか、と。

人は、その場面に応じた行動を自然と身につけていく。皆が定型化された行動をし、決められた橋を渡り、ステージを終える。しかし、役割が詳細に分化するこの世界では、人が取らなければならない行動も複雑化している。時代が変われば、人々の思考が変わっていくように、取るべき行動は固定化されないはずだ。多くの人が同じ考えを持ち、同じ行動をしなくても良いはずなのだ。

だからこそ、ある人にとってみれば普通であることが、ある人にとってみれば空気が読めないということになる。どこでその線引きがなされるかは誰にも分からない。いつその線が引かれたのかも分からない。人々はそういう曖昧な平地に対して、無防備に立ち向かっているのだ。

「いらっしゃいませ」

そう言って、ほほ笑みをたたえながらおじぎをする店員を見ると、健人は少し身構えてしまう。

「お客様、どうかされましたか」

この人は、あえてその言葉を発しているのか。意識的に、そう行動しているのだろうか。

皆が定型パターンを演じているように感じる。どの仕事も、どんな人でも、役割固執病であるようにしか思えなくなってしまっていた。

「あいつ、空気が読めないんだよな」

その言葉を聞くと、思わず振り返ってしまう。

健人は思った。

「あなたの隣の人は、役割固執病ではないですか？」

(終)

惨めだったのか。他人も、自分も不幸
せなやつだと思っていたのか。そうかも
知れない。しかし、子供の頃から、ポケ
ットに星屑をつめていた。いつもこころ細
い時にはポケットのなかの闇をまさぐっ
た。明るい絶望というものだってあるの
さ。真暗なポケットに宇宙があり、希
望の星はそのうちに太陽系に飛びだ
す。うつむいて歩きながら、そう考えて
いた。あの頃、辛さと屈辱を味わったは
ずなのに、いまは懐かしい。たぶん人
にとって大切なことはポケットの中の星屑
なのだ。

浅井慎平「ポケットに星屑を」

Philosophy of Stardustbooks

——文化系の趣味を持つ人々をつなぎたい。

「自分と似た趣味を持つ人が世の中に存在しているのだろうか？」

そう思ったとき、手にとった雑誌が教えてくれた。

“あなたは、一人ではない” 自己表現して、セカイとつながる。

スポーツが好き。アウトドア

が好き。決して嫌いなわけでは

ないけど、たまにみんなとノリ

が合わないときがある。

小説が好き。映画が好き。漫

画が好き。でも、オタクと呼ば

れる人たちとは少し違う気が

する。

ひとりで考え込み、ノートに

書きつけ、誰かと出会いたいと

試行錯誤を繰り返す。

そんな人たちがつながり、自

己表現する場をつくります。

星屑書房★
STARDUST BOOKS

星屑書房は文化・芸術活動を推進する団体です。

stardustbooks@live.jp <http://stardustbooks/soragoto.net/>

編集後記



一路真実

山田詠美『僕は勉強ができない』（1996）では、生きるうえでは勉強よりも大切なことがあるということが描かれたわけだけど、じゃあ空気が読めなかったら、現代で重要視される人間力がなかったら、どうなるんだろうと思って小説を書きました。

鳩山豆子



創星も今回でVOL. 5…ゆるーいペースですが、結構長く続いていることが嬉しい限りです。これからはもうちょっとペースを上げていけたらさらに嬉しいです。みなさまよろしくっす。



ババタカオ

初めまして。
この度、小説を寄稿させていただきました。
次にお会いするときは、エッセイかもしれません。
興味は尽きないのです。

天沼太郎



クラシック熱が高じて、昨年末、LPプレイヤーを購入。最近はCDよりレコードの毎日。取り扱いが面倒な分（途中再生が難しい、トラックを飛ばせない等）、曲をしっかりと聴くようになった気がします。
mailto:doguramagura71@gmail.com



To's job

今回も表紙を担当しました。
平成24年6月25日（火）から7月1日（日）まで
福岡市美術館市民ギャラリーB室で展覧会をします。

マチコ・ネコ・マッシュラ



猫を飼い始めました！これで一人前の漫画家ですね！

星屑書房について & メンバー募集！！

星屑書房は好き勝手に表現活動をしていく文化系サークルです。

現在は、フリーペーパーの制作・配布が中心ですが、今後は幅広く、文化系活動をしていく予定です。

本を読むことが好き。本を自分で作ってみたい。

映画を観ることが好き。映画を撮りたい。・・・などなど、文化系趣味を持つ人々をつなぎます。

社会人が中心ですが、誰でも入会OK！「こんな活動してみたい！」という提案募集中☆

少しでも興味を持たれた方はこちらにご連絡ください！ stardustbooks@live.jp

お待ちしております！

☆星屑書房ホームページ：<http://stardustbooks.soragoto.net/>

フリーペーパー『創星』5号

2012年4月29日 初版

<http://p.booklog.jp/book/58901>

表紙デザイン : To's job

著者 : 星屑書房

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/stardustbooks/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/58901>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/58901>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社ブクログ

星屑書房

<http://stardustbooks.soragoto.net/>